

元国交省・河川技術者が暴く「計画のまやかし」 ～「2020年7月豪雨」は対象外！？～

2026年7月5日開催 シンポジウム詳報集会報告(宮本講演)



7月5日、行政の治水マニュアルが持つ危険性を技術者の視点から鋭く告発する宮本博司氏
(元国土交通省河川局防災課長)

元本省防災課長が暴露する川辺川ダム計画の「本質」

次に登壇したのは、旧建設省に入庁以来、河川業務一筋に歩み、本省河川局防災課長を最後に退官した宮本博司氏。「ダムがあれば全ての水害を防げるわけがない」と言い切る宮本氏が、国や県がひた隠しにする河川整備計画の「驚くべきカラクリ」を次々と白日の下にさらした。

① 大災害の教訓を無視した「都合の良いフィクション」

「実は、新しくできた球磨川の河川整備計画のなかには、あの6年前の大水害、2020年7月の豪雨災害は対象になっていないのです」宮本氏の口から飛び出した最初の事実、会場は一瞬静まり返った。

2020年7月、人吉では12時間に322ミリという猛烈な雨が降った。しかし、いま国が進めているダム建設計画は、12時間に「298ミリ」という過去の基準(基本方針)の雨しか想定していない。「6年前の大災害でダムが必要だと言って復活させたのに、計画の対象にはその大洪水を入れない。なぜか。たまたま298ミリくらいの雨なら、何十年も前から国が用意してきた高さ107.5メートルのダム計画をそのまま当てはめると、『効果がある』というストーリー(フィクション)が作れるからです」

② 「ここから先は知りません」という流域治水の嘘

国は、298ミリまでの雨はダムと河川改修で頑張るが、それを超えたら「流域治水で皆さん頑張って逃げてください」という線を引いていると宮本氏は指摘する。「しかも、その298ミリの計画すら、費用対効果(B/C)を計算すると『0.4』しかありません。建設コストに対して、免れる経済被害が半分以下。普通の公共事業なら絶対にストップする数値です。それを無理やり継続させるために、国はこれから使うお金(残事業費)だけで計算する都合の良い仕組みにすり替えてしまった」

どのような大雨が降っても、住民の命は絶対に落とさせない。
それが本来の治水のはずです。ある都合の良い線だけを引いて、
『ここから先は想定外だから自力で逃げて』というのはおかしい。